

「美人画の雪月花 -四季とくらし 培広庵コレクションを中心に」展 作品解説

徳島県立近代美術館

■四季【秋】

31 山村耕花(やまむら こうか) 「四季図 [夏の虹・秋の月]」

1918(大正7)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

これは、四季の風俗を表した二曲一双屏風のなかの、夏と秋の部分だと考えられます。どちらも江戸時代の後期、天明、明和頃の風俗で、当時の錦絵を参照しています。左幅は夏の図。虹のかかる深川あたりの風景を背景にして、縦縞模様の着物を着た二人の女性が描かれています。一人は手ぬぐいを頭から垂らし、一人はお三輪巻で鉢巻きをしています。右幅は、若衆歌舞伎の美青年なのでしょうか、中剃りをした若衆鬘(まげ)の人物が秋草と仲秋の名月を背にしてたたずんでいます。(Y.M)

32 石井滴水(いしい てきすい) 「後(のち)の月」

1907(明治40)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

二人の女性が何やら小さな紙片を見えています。着物は綸子地(りんずじ)に波と千鳥、あるいは揚羽蝶の長着(ながぎ)。右の女性の髪型は、島田鬘(まげ)、左の女性は櫛巻(くしま)きです。床に置かれた有田焼の器には花林糖(かりんとう)と紙がありますので、女性が見ているのは、辻占(つじうら)菓子のおみくじのようです。時期は、「後(のち)の月」と呼ばれる満月間近の旧暦9月13日。浄瑠璃本「梅の春・后月名残の嶋台」が床に散らばっており、賑やかな酒宴が終わった後のようすなのかもしれません。(Y.M)

33 岡本大更(おかもと たいこう) 「新涼(しんりょう)」

1932(昭和7)年 絹本着色 培広庵コレクション

「新涼」とは、秋のはじめの涼しさのこと。俳句では秋の季語の一つとされています。いくらか暑さが弱まり、空気もさらっとして爽やかさが感じられる時期に用います。この絵の女性は、小菊文様の団扇を持ち、薄い生地を着物から素足を見せていて、夏の装いです。それだけに季節の変化を敏感に感じているのかもしれません。浮世絵でよく描かれた、ほっそりとした背の高い美人の姿です。(Y.M)

34 木谷千種(きたに ちぐさ) 「涼宵(りょうしょう)」

昭和10年代 絹本着色 培広庵コレクション

渋い朱色が印象的な帯には、夏をしめす麻の葉の文様があしらわれます。涼しげな淡い青色の着物には流水に菊と紅葉を組み合わせた菊水(きくすい)の文様。帯と着物の双方から、夏から秋へ移り変わる時期で

あることが分かります。団扇を手に、すだれを掛けた縁側にひとり立って涼む姿には、どこか凜とした風情が漂います。(H.M)

35 幸野楳嶺(こうの ばいれい) 「今様官女図」

明治初期 絹本着色 培広庵コレクション

京都の御所に仕えた女官といえば、平安時代以来の十二単を着た姿が思い浮かぶでしょう。ところがこの女性は秋草の文様をあしらった江戸時代以降の女官の正装を着こなしており、これが「今様」というタイトルの所以です。菊の絵が描かれた衝立の中に画家の落款(サイン)を入れているところは、見る人の興味をそそります。(H.M)

36 伊藤小坡(いとう しょうは) 「秋の夜」

大正前期 絹本着色 培広庵コレクション

秋の夜の室内です。瓢箪(ひょうたん)を図案化した華やかな色彩の着物にだらり結びで市松模様の帯を締めた女性。そして、油皿に裸火(はだかび)がともった短檠(たんけい)のような背の低い灯台(ともしだ)が描かれています。灯台の柱には、キリギリスの仲間なのでしょうか、秋の虫がとまっています。部屋に迷い込んで鳴く虫を、女性が振り返るようにして見つけ、微笑んでいます。(Y.M)

37 中村大三郎(なかむら だいさぶろう) 「静思」

1920(大正9)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

大三郎は画業の前半では寛永期の風俗をこよなく愛し、当時の美人を多く描きました。文化が爛熟(らんじゅく)し退廃的なムードをたたえる寛永期のイメージと、この静かにまぶたを閉じる女性の姿が一線を画しているのは、画家が美人画を仏画のように描きたいという理想をもっていたからです。女性の内省的な表情は、画家の理想の表れであるといえます。(H.M)

38 北野恒富(きたの つねとみ) 「願いの糸」

1914(大正3)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

七夕の夜には、水を張ったたらいの中に梶(かじ)の葉を浮かべ、星明かりをたよりに紅白の糸を針の穴へ通して裁縫の上達や恋愛成就を願うという風習がありました。恒富が描くこの女性は、伏し目の横顔や頼りない手のしぐさがいじらしく、繊細な糸の表現と相まって、恋の祈りをしている健気な心情が伝わってくるようです。(H.M)

39 池田蕉園(いけだ しょうえん) 「秋思」

1913(大正2)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

秋草模様の晴れ着を着た娘が、草紙を開いて読むうちに、文机(ふづくえ)に肘をつき、うとうとと微睡(まどろ)んでしまったようです。彼女の髪型は島田髷(まげ)。頭の両側に張り出し透けて見える髪は、江戸時代中期に流行した灯籠髷(とうろうびん)。頭にさしたびらびら簪(かんざし)が揺れています。すだれは夏の名残を示すものなのでしょう。(Y.M)

40 岡本大更(おかもと たいこう) 「静秋読書の図」

1918(大正7)年 絹本着色 培広庵コレクション

秋の夜長に読書する女性のような様子を表しています。丸行灯(あんどん)を明かりとしているので、江戸時代の情景なのでしょう。しかし人物表現には、どこか生々しさが漂っています。文机(ふづくえ)に肘をつき頬杖(ほおづえ)をついた女性は、髪がほつれ、正座を崩して座っているようにも見えます。明治末から大正にかけて描かれた、女性を生身の人間として描く傾向に連なる作例といえそうです。(Y.M)

41 大林千萬樹(おおばやし ちまき) 「絵本見る女」

1928(昭和3)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

膝の上で広げた本を見る、横顔の女性を描いています。この作品の特徴は、細い線と淡い濃淡によって表された控えめな写実味でしょう。頭の横に張り出した灯籠髷(とうろうびん)の透けたようすもリアルに表されています。和綴じの本は、江戸時代に出版された絵入りの娯楽本、大人向けの黄表紙のようです。富士山と旅姿の武士や奴(やっこ)が描かれているのが分かります。(Y.M)

42 松浦舞雪(まつうら ぶせつ) 「よそおいのまえ」

1932(昭和7)年 絹本着色 培広庵コレクション

襦袢(じゅばん)姿で身支度をする芸妓(げいぎ)が、姿見を見て髪を整えているところのようです。襦袢は肌着ですので、華やかな世界で生きる女性のプライベートを覗くような場面といえます。床の衣装盆には、これから着る着物が畳んで置かれています。その落ち着いた色彩の着物を着ると、鮮やかな襦袢の色彩が、衿(えり)元や裾、袖口から見えて色気を感じさせるのでしょう。(Y.M)

43 鱒崎英朋(ひれさき えいほう) 「もみじ」

大正中期 絹本着色 培広庵コレクション

振り返る女性のようなようすは、どこか江戸時代中期の浮世絵師、懐月堂安度(かいげつどう あんど)の美人画を思わせます。着物の部分は、肉筆の浮世絵のように肥瘦(ひそう)のある線で大きく捉え、顔の部分は写

生を活かしています。髪が生え際は、細い線を重ねた描写が細密です。このような表現から、浮世絵の伝統を活かして近代の美人画を創ろうとした試みがうかがえるのかもしれませんが。舞い落ちる赤い紅葉の葉は季節感を演出しています。(Y.M)

44 伊藤小坡(いとう しょうは)「観楓(かんぷう)美人の図」

大正後期 絹本着色 培広庵コレクション

女性が、手すりに座って休んでいます。着物は、裾の部分に淡く暈かしが入り、蔦模様は手描きされた友禅のようです。五つ紋の着物から、改まった服装であるのが分かります。紋は結び雁金(かりがね)。紅葉で色づく秋の日、一仕事終えた女性が、安堵の気持ちとともに少し息をついているのでしょうか。床には煙草盆だけが置かれています。鬢(びん)のほつれに見られる疲れの表現には、同性としての共感が込められているのかもしれませんが。(Y.M)

45 三宅鳳白(みやけ こうはく)「紅葉狩」

昭和初期 絹本着色 培広庵コレクション

風景も着物も秋のイメージでいっぱいです。着物の上半身は藍で白く抜いた紅葉の文様。浅く染めた青色ですので、秋空をイメージしているのかもしれませんが。そして、裾と袖には色づいた葦が描かれています。女性のまわりには、秋の七草が、遠方には松や杉の木立が見えます。作品のタイトルにある紅葉とは、松の手前に点々と描かれた赤い葉のことなのでしょう。控えめな品のよさの表れた作品です。(Y.M)

46 勝田哲(かつだ てつ)「秋晴」

1935(昭和10年)頃 絹本着色 培広庵コレクション

紅葉の葉が落ちる道を歩き、親子でお出かけです。右側の母親は、綿帽子をかぶり、左の娘は角隠しをつけています。今日では、いずれも婚礼衣装となっていますが、江戸時代には外出時の装いでした。この作品は江戸期の風俗を描いたものといえるのです。二人の装いは対比的で、母親が落ち着いた紫の着物なのに対して、娘は、菊の花が描かれた華やかな友禅の振り袖。娘の帯の下には、外出時に丈の長い裾をくくる抱え帯が見えています。(Y.M)

47 鎗木清方(かぶらき きよかた)「秋の錦」

1947(昭和22)年 絹本着色 培広庵コレクション

町駕籠(まちかご)を降りたときに吹き抜けた秋風を体に受ける女性の、一瞬の美しさを描いたもの。駕籠のまわりには秋の葉が散っていますが、振袖の裾(すそ)に配した蔦(つた)の文様、駕籠の上の菊の花束も、秋の空気を強調します。また、駕籠の敷物には一年を通して吉祥の意味で用いられる橘(たちばな)の文様があしらわれています。(H.M)

48 広田多津(ひろた たづ) 「大原女」

1942(昭和 17)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

大原女とは、京都の北の郊外、大原の里(現・京都市左京区)から、行商にやってくる女性たちのこと。薪などを頭の上に載せて街を売り歩くのです。この絵に見られるように、手ぬぐいをかぶった頭に頭当てを置き、手には手甲(てっこう)、足には脚絆(きゃはん)を巻き、三幅前垂(みはばまえだ)れをつけて、手で荷物を押さえながら歩いていました。服装は地味な労働着といえますが、ここでは腰紐やたすきに色布を用いて、華やぎを加えています。(Y.M)

49 紺谷光俊(こんたに こうしゅん) 「採果図」

昭和初期 絹本着色 培広庵コレクション

若い女性と幼い少女が葡萄を収穫しています。葡萄は実が多く、子孫繁栄を示す吉祥のしるしでした。このような「樹下美人図」は、さかのぼれば古代オリエントから洋の東西で繁栄や豊穡を祈って描かれており、日本でも正倉院の樹下美人図が知られています。満面の笑みをたたえた女性を描いた本作品も、それに連なるものなのかもしれません。風俗は、桃山から江戸初期。葡萄や籠が西洋的な写実で表されているのも興味深い点でしょう。(Y.M)

50 菊池契月(きくち けいげつ) 「虫撰(むしえらみ)」

1930(昭和 5)年頃 絹本着色 徳島県立近代美術館蔵

秋の虫の美しい声や姿を競う「虫撰」(むしえらみ)と呼ばれる遊びは、平安時代に始まったといわれます。この女性も、手にしている籠(かご)の中の虫に夢中になっていることが、その眼差しや髪の毛の動き、わずかに開けられた口元から伝わります。生涯にわたり古典的な題材をもちいて女性像を描き続けた契月の、画風の円熟を示す作品です。(H.M)

51 小川雨虹(おがわ うこう) 「涼風(すずかぜ)」

1935(昭和 10)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

夏のすだれ越しの女性は、江戸時代の浮世絵から近代の美人画に受け継がれた題材です。ただし、この絵には初秋のイメージがたくさん登場します。女性が着る黒い薄物の文様は、秋の七草の一つ撫子(なでしこ)です。袖口を見ると、襦袢(じゅばん)の赤い撫子文ものぞいています。彼女が持つ団扇には、仲秋の名月を示す大きな望月(もちづき)が表されています。夏に用いる露芝(つゆしば)の文様もありますので、暑さが少しずつ弱まっていく季節感を表しているのでしょう。(Y.M)

52 中村貞以(なかむら ていい)「良宵(りょうしょう)」

1935(昭和10)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

細線で、落ち着いたしっかりした表情の女性が表されています。濃い藍の着物には、疋田絞(ひったしぼ)りの文様がありますが、よく見ると、細い線で双葉葵が図案化されているようです。頭にも、葵の簪(かんざし)が挿されています。背景には、単純化された墨の群竹が表されていますので、夜を示しているのでしょう。作品名の「良宵(りょうしょう)」とは、よい夜のこと。仲秋の夜も指しますので、金の団扇を持つ女性の視線の先には、美しい満月が出ているようです。(Y.M)

解説 森 芳功(Y.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>

宮崎 晴子(H.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>